

— 目 次 —

■年頭にあたって 県知事 沢田一精…………… 6

■座談会 ことしはこんな年に…………… 8

有田 一 郎
佐藤 慶 子

出席者（五十音順） 沢田 一 精
杉本 泉
藤井 輝 章

■美しい熊本づくり運動
標語入賞決まる…………… 14

■随 想…………… 15

原田昭子・規工川宏輔・出田憲二

■海外レポート…………… 24

■美しい熊本づくり運動
今後の方向づけのために…………… 26

宮崎方式に学ぶ（岩切章太郎氏の講演から）

■〈この人と30分〉…………… 32

風刺とユーモアに生きる・那須良輔

■物価を考える・佐藤 静…………… 36

■グラビアページ

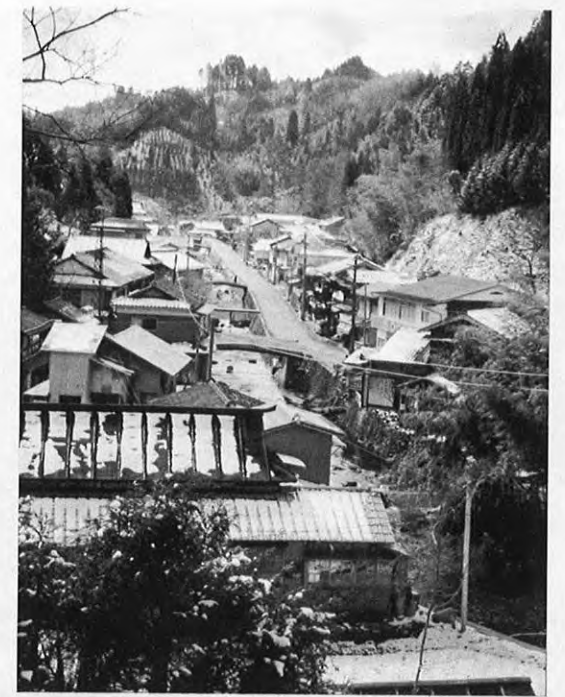
- ・〈ふるさと心〉 満願寺温泉…………… 3
- ・オープン間近か・県立天草青年の家…………… 17
- ・ユニークな工場づくり…………… 18
- ・カラー熊本…………… 20
- ・県立美術館へ高まる期待…………… 22
- ・みんなで町をきれいに…………… 23
- ・保護された原生林…………… 37

建設進む菊池・阿蘇スカイラインにみる

（表紙写真は肥後六花の一つ肥後椿）



▼嫁入りの日の朝、村人の見送りを受けて満願寺に詣でる



▲静かなたたずまいをみせる湯の里・満願寺

冬の満願寺

満願寺の夜明けは楼門の鐘の響きから始まる。午前六時、鐘の音は大寒の薄明の中を楼門から村落に朗々として鳴り渡る。そして、この里の人たちはいち日の始まりを知る。

「満願寺」と呼ぶとき、今では、龜山上皇の第二皇子経杵大僧正の開基になる「立護山醍醐満願寺」とこの周辺にたたずむむかたまりの村落を含めていう場合が多い。かつてこのあたりの地は「志津の里」と呼ばれた。恐らく寺の前を流れる志津川の名をとったものであろう。

志津川には湯けむりがたつ。鐘の音で目覚めた里人たちは、やがて、食器を洗い、衣類を濯ぐためにここの湯壺に集まる。そして、食べ残しの餌をもとめて家鴨や鯉が勢いよく群がる。

阿蘇北外輪に接する遙かな高原の起伏の盡きるあたり、標高五百以上のこの山峡を吹く風は冷たく積む雪は深いけれども、ここに集う女たちの心はあたたかく通いあう。

文永十一年（一二七四）、鎌倉幕府執権・北条時頼の弟時定は阿蘇小国の地頭として下向、元寇の役の祈願寺にこの地を選んだ。けだし、九州の中央部に位し、要害堅固の地勢を備えていたからであろう。

里人は幼いころから、正月にはこの寺に集まり、「投扇興」や「百人一首に興じた。かつては、門前に祭礼の市が立ち、近郊から人が集まった。

「年頭」、「星祭り」、「春祭り」、「風祭り」、「花祭り」、「夏祭り」……四季の営みに応じて繰りひろげられるささやかな祭礼のたびに人は楼門をくぐった。

幼い子供だった人達の中には、長じて都市へ移った者もいる。しかし、いまでも帰郷したときは楼門の綱を引くという。

鐘が頭上に鳴るとき、彼らは都市に生きる自分の心が未だここに少しだけ残っていることをあらためて思い起す。

やがて、この厳しい寒のひとときが過ぎれば、志津川の岸に並ぶ十本の桜が一斉に花を開くであろう。花びらのいくつかは川の流れにただよい、湯壺にも舞い落ちるであろう。

満願寺は、いま、長い冬に耐えている。